

# 保育者養成校がキャンパス内で行っている 子育て支援活動に関する調査研究

Survey on Child-rearing Support Program by Training School for ECEC Teachers

小原敏郎 中西利恵<sup>1</sup> 直島正樹<sup>2</sup> 石沢順子<sup>3</sup> 三浦主博<sup>4</sup>

Toshio OHARA, Rie NAKANISHI, Masaki NAOSHIMA,  
Junko ISHIZAWA and Kimihiro MIURA

## 1. 緒言

近年、わが国では子育て支援の担い手として保育者（保育士・幼稚園教諭）の役割の重要性が多く論じられている。2008（平成 20）年に改訂された保育所保育指針<sup>1)</sup>や幼稚園教育要領<sup>2)</sup>では、保育者の役割として地域における子育て支援や保護者への支援が規定された。さらに、保育士を養成する課程では、2011（平成 23）年度の保育所保育指針の改訂に伴い、「保育相談支援」や「家族支援論」のように子育て支援に関連する授業科目の充実が図られた。養成段階において子育て家庭を支援する力の養成は喫緊の課題となっている。

子育て支援を実践する力の養成にあたり具体的な課題を検討した研究では、子育て支援力を育てるためには理論（授業）と体験（実習）が欠かせないという報告がなされている（土居、2011）<sup>3)</sup>。また、秋山（2011）<sup>4)</sup>の研究では、「実際に保護者と接する機会の少ない学生に対し、どのような形での経験刺激を与え、実践的な保護者対応への力を向上させるのか、カリキュラムや指導企画においても今後の課題は多い」ことが述べられている。このように先行研究から、保護者とかがかわる経験が少ない学生に対し、養

成段階で直接的な保護者とのかかわりの場をいかに用意するかが子育て支援力育成の課題として問われている。

一方で、学生と保護者との直接的な関わりに関連した先行研究では、福井・小栗・瀧川（2008）<sup>5)</sup>の研究がある。福井らは、学生が参加する子育て支援活動に関する調査を実施し、保育者を養成する短期大学 66 校の集計結果について報告している。活動の実態に関する主な結果としては、ペアサポート・パネルシアターなど親子に見せるというような支援者側が提供する活動が多く実施されていた。しかし、福井らの研究は、少数の短期大学を対象とした調査であることから、活動内容や学生の体験内容の結果も限定的といえる。これまでの研究を概観しても、養成校に大規模な調査を行った研究は見当たらない。そのため、本研究の第 1 の目的として、保育士養成校に大規模な調査を行う。さらに、今後、各養成校が子育て支援の取り組みを拡大していくための参考資料となるよう、まずはキャンパス内での子育て支援活動に焦点をあて、その実施形態や内容、学生の参加形態や活動の内容等の実態を明らかにする。

また、秋山（2011）<sup>4)</sup>は、従来の研究は、自校の子育て支援活動を対象に取り組み方法や活

1 相愛大学

2 相愛大学

3 相愛大学

4 東北生活文化大学短期大学部

動実態の報告に終始する内容が多いと指摘している。つまり、学生に活動を通してどのような子育て支援力を身につけてもらいたいかという子育て支援の専門性に関する検証があまりなされていないと考える。そのため、第 2 の目的として、養成校の教員が活動を通して学生に身につくと期待している子育て支援力の実態を明らかにする。

## 2. 方法

### (1) 対象とした養成校（課程）と調査期間

厚生労働省が作成している全国指定保育士養成施設一覧（平成 25 年 4 月 1 日時点）から通信制を除き、同一校で 2 つ以上の課程がある場合は統合するなどし、565 校（課程）に質問紙を送付した。調査期間は平成 25 年 10 月～12 月であった。その結果、189 校（課程）から回答を得た。回収率は 33.5%であった。

### (2) 対象とした養成校（課程）の基本属性

分析対象とした養成校（課程）の基本属性は、以下の表 1 に示した通りである。

### (3) 質問紙の内容

1) 用語の定義：本調査では次のことを回答者に質問紙の中で明示した。①「子育て支援」とは、子どもの健やかな育ち及び保護者の子育てへの直接的・間接的な支援を意味すること。②「子ども」とは就学前の子どものみに限定すること。③「キャンパス内」で行われる子育て支援活動を対象とすること。「キャンパス内」とは、実施場所がキャンパス内で行われており、付設している保育所（認可・認証）や幼稚園などで行われている子育て支援活動は含まないこと、である。

2) キャンパス内での子育て支援の実施形態・概要について：①運営主体、②開設期間、③参加費、④スタッフの構成、について質問した。

3) 参加学生について：①単位取得、②活動中の参加形態、③参加頻度、④活動後のふりかえりについて質問した。

4) 活動に参加したことで、学生に身につくことが期待される知識や技術について：汐見(2007)<sup>6</sup>の保育者に求められる子育て支援力の分類、橘・小原(2014)<sup>7</sup>の学生時代に参加した子育て支援活動から得られた知識や技術に関して保育者が回答した自由記述の内容を参考にし、27 項目を作成した。「よくあてはまる」

表 1 対象校（課程）の基本属性

設置主体	度数	(%)	学校種別	度数	(%)	入学定員	度数	(%)	所在地	度数	(%)
国立大学法人	7	(3.7)	四年制大学	71	(37.6)	50 人以下	51	(27.0)	北海道地方	8	(4.2)
公立大学法人・ 公立大学	5	(2.6)	短期大学 (三 年制も含む)	67	(35.4)	51 人～100 人	72	(38.1)	東北地方	19	(10.1)
学校法人	156	(82.5)	専修学校 (専 門学校)	37	(19.6)	101 人～150 人	30	(15.9)	関東地方	48	(25.4)
その他、無回答	21	(11.1)	その他、無回答	14	(7.4)	151 人以上	24	(12.7)	中部地方	30	(15.9)
						その他、無回答	12	(6.3)	近畿地方	37	(19.6)
									中国・四国地方	20	(10.6)
									九州地方	15	(7.9)
									その他、無回答	12	(6.3)

から「全くあてはまらない」までの5件法で質問した。

すべての分析は統計ソフト SPSS (Ver20.0) を使用した。

#### (4) 分析方法

##### 1) 子育て支援の実施形態の分類

福井・小栗・柴田他(2010)<sup>9)</sup>の研究では、学生が参加する子育て支援活動を、親子遊び(イベント)型、ひろば(サロン)型と分類している。それを参考にし、本研究では、実施形態を「ひろば」型、「教室」型、「鑑賞・発表会」型と分類した。以下の結果はこれらの枠組みをもとに分析を進める。なお、質問紙において「ひろば」型は、常設で専属スタッフを有し、親子が自由につどい、交流ができる場を提供している活動。「教室」型は、親子の遊びの教室、ものづくりの活動、異世代・地域交流、サマースクールなどを実施する活動。「鑑賞・発表会」型は、学生が行う音楽会や人形劇などを親子が鑑賞する形式で行う活動、であることを明記した。

##### 2) 統計

子育て支援の実施形態については、実態を明らかにするため記述統計を算出する。参加学生の実態や学生に身につくことが期待される知識や技術については記述統計とともに、子育て支援の活動形態を独立変数とした分析を行った。なお、記述統計、 $\chi^2$ 検定、分散分析など、す

### 3. 結果と考察

#### (1) キャンパス内での子育て支援の実施実態

分析対象とした養成校(課程)が、キャンパス内においてどのような子育て支援活動を実施しているかを算出した結果が表2である。結果を見ると、「教室」型の子育て支援活動を実施していると回答した養成校が34.9%と最も割合が高かった。次いで、「鑑賞・発表会」型、「ひろば」型が2割を超えていた。一方で、「特に取り組みを行っていない」という回答も2割を超えていた。また、項目1～6に当てはまらない「その他」の形態が5.8%あった。過去、本研究と同様の全国調査を行った研究が見当たらないため比較はできないが、比較的多くの養成校が何らかの子育て支援活動を行っている実態が明らかになった。

#### (2) 「ひろば」型の子育て支援活動の結果

「ひろば」型の子育て支援活動を実施している38校(課程)の実態を示した結果が表3である。「ひろば」型の特徴は、運営主体が「学内にセンター等を設置して学校全体で組織的にやっている」(55.3%)、「学科・専攻等で組織的

表2 子育て支援活動の実施実態 (N = 189) (複数回答)

項目	度数	(%)
1. キャンパス内での「ひろば」型(常設で専属スタッフを有する)の子育て支援活動の実施(例えば、親子が自由につどい、交流ができる場を提供している)	38	(20.1)
2. キャンパス内での「教室」型の子育て支援活動の実施(例えば、親子の遊びの教室、ものづくりの活動、異世代・地域交流、サマースクールなどの実施)	66	(34.9)
3. キャンパス内での「鑑賞・発表会」型の子育て支援活動の実施(例えば、音楽会や人形劇の観賞など)	48	(25.4)
4. キャンパス内において親を対象とした子育て・発達等の相談室の設置	33	(17.5)
5. キャンパス内において親を対象とした講習会の実施(例えば、親を対象とした発達や健康、栄養などの講習会など)	27	(14.3)
6. 特に取り組みは行っていない	50	(26.5)
7. その他	11	(5.8)

に行っている」(26.3%)となり、合計すると学校や学科等で組織的に行っている割合が8割を超えていた。また、活動がどのくらいの期間行われているかという開設期間を質問したところ、5年以下と回答した養成校が4割以上、10年未満まで合わせると8割以上であった。比較的運営の歴史が浅いことが特徴といえる。さらに、表4を見ると、「ひろば」型のスタッフとして、有給の常勤或いは非常勤の保育者が、企画や運営、または、直接親子に関わっている割合が約3～4割を占め、他の活動に比べて高いことが分かる。

(3)「教室」型の子育て支援活動の結果

表3に示された「教室」型の特徴は、運営主体を見ると、「一部の教員が個人的に行っている」(7.6%)から「学内にセンター等を設置して学校全体で組織的に行っている」(12.1%)まで一定の割合が見えることである。学校の事情によって個人、教員間の協働、組織的と

いった運営主体がとられていることが分かる。また、「ひろば」型と同様に、開設期間が5年以下と回答した養成校が5割、10年未満が8割以上であり、比較的運営の歴史が浅いといえる。参加費の有無では、「はい」と回答した養成校が2割程度で、他の活動形態に比べて参加者から費用を徴収している割合が高かった。表4のスタッフの構成を見ると、教員が「活動の企画や運営などに関わっている」「直接親や子どもに関わっている」という割合が高いことが分かる。また、学部生<sup>1)</sup>も「直接親や子どもに関わっている」(81.8%)という割合が高い。一方で、教員と学部生以外のスタッフが関わっている割合は低い。このことから学内の教員と学生が協働して一つの活動を行っている様子が伺える。

(4)「鑑賞・発表会」型の子育て支援活動の結果

表3に示された「鑑賞・発表会」型の特徴は、運営主体を見ると、「学科・専攻等で組織的に

表3 キャンパス内での子育て支援の実施形態

	「ひろば」 型の活動 N=38		「教室」 型の活動 N=66		「鑑賞・発表会」 型の活動 N=48	
	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)
運営 主体	一部の教員が個人的に行っている	1 (2.6)	5 (7.6)	4 (8.3)		
	学科・専攻等で組織的に行っていないが、複数の教員が協働して行っている	10 (26.3)	9 (13.6)	8 (16.7)		
	学科・専攻等で組織的に行っている	0 (0.0)	23 (34.8)	22 (45.8)		
	学内にセンター等を設置して学校全体で組織的に行っている	21 (55.3)	8 (12.1)	3 (6.3)		
	その他・無回答	6 (15.8)	21 (31.8)	11 (22.9)		
開設 期間	1年～2年	5 (13.2)	8 (12.1)	7 (14.6)		
	3年～5年	12 (31.6)	25 (37.9)	12 (25.0)		
	6年～9年	15 (39.5)	22 (33.3)	12 (25.0)		
	10年～14年	4 (10.5)	6 (9.1)	2 (4.2)		
	15年以上	0 (0.0)	1 (1.5)	8 (16.7)		
	無回答	2 (5.3)	4 (6.1)	7 (14.6)		
参加費 の有無	はい	3 (7.9)	13 (19.7)	3 (6.3)		
	いいえ	33 (86.8)	49 (74.2)	39 (81.3)		
	無回答	2 (5.3)	4 (6.1)	6 (12.5)		

保育者養成校がキャンパス内で行っている子育て支援活動に関する調査研究

表 4 スタッフの構成（複数回答）

	「ひろば」型の活動 N=38		「教室」型の活動 N=66		「鑑賞・発表会」型の活動 N=48	
	①活動の企画 や運営など に関わって いる	②直接親や子 どもと関わ っている	①活動の企画 や運営など に関わって いる	②直接親や子 どもと関わ っている	①活動の企画 や運営など に関わって いる	②直接親や子 どもと関わ っている
	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)
教員	31 (81.6)	20 (52.6)	62 (93.9)	51 (77.3)	35 (72.9)	28 (58.3)
学部生	17 (44.7)	24 (63.2)	39 (59.1)	54 (81.8)	30 (62.5)	33 (68.8)
大学等の職員 (事務職など)	10 (26.3)	6 (15.8)	1 (1.5)	13 (19.7)	12 (25.0)	9 (18.8)
有給の常勤保育者 (保育士・幼稚園教諭等の有 資格者)	11 (28.9)	11 (28.9)	1 (1.5)	6 (9.1)	4 (8.3)	4 (8.3)
有給の非常勤保育者 (保育士・幼稚園教諭等の有 資格者)	14 (36.8)	16 (42.1)	4 (6.1)	7 (10.6)	3 (6.3)	5 (10.4)
参加している保護者	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (4.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)

行っている」(45.8%)が他の活動に比べて割合が高かったことである。学校全体で組織的に行っている割合は低く、学科・専攻等の取組として行われている場合が多いことが伺える。開設期間は、10年以上と回答した養成校が約2割あり、比較的古くから活動を行っている養成校が他の活動と比べて多いことが分かる。さらに、表4のスタッフの構成を見ると、教員、学部生とも「活動の企画や運営などに関わっている」「直接親や子どもと関わっている」という割合が比較的高いことが分かる。

(5) 参加学生について

子育て支援活動に参加した学生に関する分析を行う。対象としたのは、「スタッフの構成」の回答において、学部生が「活動の企画や運営などに関わっている」「直接親や子どもと関わっている」と答えた養成校（課程）教員の回答である。

1) 学生の単位取得

学生の単位取得に関して、まず全体の傾向を見ると、「1. 取得できる」(41.1%)、「3. 取得できない」(51.9%)となっていた(表5)。「3. 取得できない」が半数以上で、自主活動やボラ

表 5 学生の単位取得

		1. 取得できる	2. 取得の方向で検 討中	3. 取得できない	無回答
「ひろば」型の活動 (N=30)	度数 (%)	10 (33.3)	1 (3.3)	18 (60.0)	1 (3.3)
「教室」型の活動 (N=61)	度数 (%)	30 (49.0)	4 (6.6)	26 (42.6)	1 (1.6)
「鑑賞・発表会」型の活動 (N=38)	度数 (%)	13 (34.2)	1 (2.6)	23 (60.5)	1 (2.6)
全体 (N=129)	度数 (%)	53 (41.1)	6 (4.7)	67 (51.9)	3 (2.3)

ンティア活動として参加している学生が多いことが伺える。傾向として、「教室」型の活動で「1. 取得できる」(49.0%) の回答が多いことが分かる。

2) 学生の参加形態

活動形態による比較を行うために、項目ごとに  $\chi^2$  検定を行った (表 6)。結果、「2. 子どもと自由にかかわる」( $\chi^2(2)=22.5, p<.01$ )、「3. 親と自由にかかわる」( $\chi^2(2)=19.1, p<.01$ )、「4. 役割をあらかじめ決めてかかわる」( $\chi^2(2)=7.8, p<.05$ ) で人数の偏りは有意であった。残差分析を行った結果、学生の参加形態として「2. 子どもと自由にかかわる」では、「ひろば」型、「教室」型の活動が有意に高い値を示し、「観賞・発表会」型の活動が有意に低かった。「3. 親と自由にかかわる」では、「ひろば」型の活動が有意に高い値を示し、「観賞・発表会」型の活動が有意に低かった。一方で、「4. 役割をあらかじめ決めてかかわる (例えば、記録係・受付係といった担当や担当する親子が決まっている)」では、「ひろば」型の活動が有意に低い値を示し、「教室」型の活動が有意に高かった。

3) 学生の参加頻度

表 7 に示したように、「ひろば」型の活動では、

四年制大学で「一部の学生が参加」が各学年で 5 割を超えていた。先の結果で示したようにこれらの活動は必ずしも単位取得ができるわけではなく、一部の学生が参加している割合が高くなったと考えられる。また、「参加していない」が 1 年生 (41.7%) で多かった。これは「教室」型の活動でも同様の傾向を示した (34.6%)。この理由は、1 年生では、「ひろば」型や「教室」型の活動に参加し、自由に親や子どもと関わることへの学びの準備が整っていないためと考えられる。短期大学・専修大学でも同様に、「参加していない」が 1 年生 (28.6%) で多く、それが 2 年生 (7.1%) では少なかった。

「教室」型の活動は、四年制大学では「参加していない」が 3 年生 (3.8%) で非常に少なく、一方で 3 年生の「3 分の 1 以上の学生が参加」(30.8%) が多かった。「教室」型の活動は、単位化されている割合が高く、参加形態の結果を見ると、「子どもと自由にかかわる」「役割をあらかじめ決めてかかわる」といった割合が他の活動に比べて高い。学内での学びの蓄積や保育所や幼稚園での実習経験を活かすことを考えて 3 年生が参加している割合が高くなっていると考えられる。

「鑑賞・発表会」型の活動は、四年制大学では「ほぼ全員が参加」が 2 年生 (33.3%) で多

表 6 学生の参加形態 (複数回答)

	1. 主として見学・観察	2. 子どもと自由にかかわる	3. 親と自由にかかわる	4. 役割をあらかじめ決めてかかわる	5. 支援者主導のプログラムを実施
「ひろば」型の活動 (N=30)	度数 14 % (46.7)	26 (86.7) *	24 (80.0) **	12 (40.0) -*	23 (76.7)
「教室」型の活動 (N=61)	6 (9.8)	48 (78.7) *	41 (67.2)	42 (68.9) **	37 (60.7)
「観賞・発表会」型の活動 (N=38)	1 (2.6)	15 (39.5) -**	12 (31.6) -**	19 (50.0)	31 (81.6)
全体 (N=129)	21 (16.3)	89 (69.0)	77 (59.7)	73 (56.6)	91 (70.5)
$\chi^2$		22.5**	19.1**	7.8*	n.s.

「1. 主として見学・観察」は期待度数が 5 以下のセルがあるため  $\chi^2$  検定は行わなかった。

\*\*p<.01 \*p<.05

保育者養成校がキャンパス内で行っている子育て支援活動に関する調査研究

表7 学生の参加頻度

	ほぼ全員が参加			3分の1以上の学生が参加			一部の学生が参加			参加していない			無回答		
	「ひろば」型 の活動 度数 (%)	「教室」型 の活動 度数 (%)	「鑑賞・発表会」型 の活動 度数 (%)	「ひろば」型 の活動 度数 (%)	「教室」型 の活動 度数 (%)	「鑑賞・発表会」型 の活動 度数 (%)	「ひろば」型 の活動 度数 (%)	「教室」型 の活動 度数 (%)	「鑑賞・発表会」型 の活動 度数 (%)	「ひろば」型 の活動 度数 (%)	「教室」型 の活動 度数 (%)	「鑑賞・発表会」型 の活動 度数 (%)	「ひろば」型 の活動 度数 (%)	「教室」型 の活動 度数 (%)	「鑑賞・発表会」型 の活動 度数 (%)
四年制大学															
1年生	0 (0.0)	5 (19.2)	3 (25)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (8.3)	7 (58.3)	8 (30.8)	3 (25.0)	5 (41.7)	9 (34.6)	2 (16.7)	0 (0.0)	4 (15.4)	3 (25.0)
2年生	2 (16.7)	6 (23.1)	4 (33.3)	0 (0.0)	3 (11.5)	2 (16.7)	8 (66.7)	9 (34.6)	4 (33.3)	2 (16.7)	6 (23.1)	1 (8.3)	0 (0.0)	2 (7.7)	1 (8.3)
3年生	1 (8.3.0)	3 (11.5)	2 (16.7)	2 (16.7)	8 (30.8)	3 (25.0)	7 (58.3)	12 (46.2)	5 (41.7)	2 (18.7)	1 (3.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (7.7)	2 (16.7)
4年生	3 (25.0)	4 (15.4)	1 (8.3)	0 (0.0)	3 (11.5)	1 (8.3)	8 (66.7)	8 (30.8)	5 (41.7)	1 (8.3)	6 (23.1)	2 (16.7)	0 (0.0)	5 (19.2)	3 (25.0)
短期大学・専修学校															
1年生	5 (35.7)	14 (48.7)	10 (45.5)	2 (14.3)	1 (3.3)	0 (0.0)	2 (14.3)	10 (33.3)	5 (22.7)	4 (28.6)	3 (10.0)	2 (9.1)	1 (7.1)	2 (6.7)	5 (22.7)
2年生	5 (35.7)	12 (40)	8 (36.4)	3 (21.4)	2 (6.7)	4 (18.2)	5 (35.7)	11 (38.7)	7 (31.8)	1 (7.1)	2 (6.7)	2 (9.1)	0 (0.0)	3 (10.0)	1 (4.5)

「ひろば」型の活動：四年制大学 N=12, 短期大学・専修学校 N = 14 「教室」型の活動：四年制大学 N=26, 短期大学・専修学校 N = 30

「鑑賞・発表会」型の活動：四年制大学 N=12, 短期大学・専修学校 N = 22

\* N が他に比べて少ないのは、四年制大学及び短期大学・専修学校からの回答と分類可能なものだけを分析したためである。

く、「参加していない」が2年生(8.3%)、3年生(0.0%)で非常に少なかった。これらの活動は学生の計画、準備したことを親子の前で発表する学生主導の形式を取る場合が多いため、実習経験も少ない2年生からでも参加できる場合が多いのではないだろうか。短期大学・専修大学の「教室」型や「鑑賞・発表会」型の参加頻度は、1年生、2年生でほぼ同様な傾向を示しており、学年による参加頻度の差があまり見られないことが分かった。

4) 活動後のふりかえり、記録について

表8に示された結果を見ると、「1. 学生同士が活動後に実践をふりかえる話し合いを行う」では、ふりかえりを「4. 毎回行っている」(38.8%)という結果は約4割に留まっており、

毎回のふりかえりが行われていない場合も多いことが明らかになった。

「2. 学生と教員・保育者が活動後に実践をふりかえる話し合いを行う」では、「ほとんど行っていない」(11.6%)の値が低かった。頻度はまちまちであるが、学生と教員・保育者との間でふりかえりがある程度行われている実態が明らかになった。

「3. 学生が活動後に実践のエピソードや学んだことを記録する」では、「4. 毎回行っている」(55.8%)の値が高かった。比較的多くの養成校で学生は毎回記録を取っていることが示された。

表8 活動後のふりかえりについて (N=129)

	1. ほとんど行っていない	2. 必要に応じてときどき行っている	3. 一定の頻度で行っている	4. 毎回行っている	その他・無回答
1. 学生同士が活動後に実践をふりかえる話し合いを行う	度数 20 (15.5)	30 (23.3)	14 (10.9)	50 (38.8)	15 (11.6)
2. 学生と教員・保育者が活動後に実践をふりかえる話し合いを行う	度数 15 (11.6)	28 (21.7)	17 (13.2)	60 (46.5)	9 (7.0)
3. 学生が活動後に実践のエピソードや学んだことを記録する	度数 21 (16.3)	18 (14.0)	9 (7.0)	72 (55.8)	9 (7.0)

(6) 学生に身につくことが期待される知識や技術について

ここで分析の対象としているのは、参加学生の分析と同様に学部生が子育て支援活動に参加している養成校(課程)教員の回答である。学生が子育て支援活動に参加したことで身につくことが期待される知識や技術を問う項目について、「よくあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5件法で回答を得た。「よくあてはまる」を5点から「全くあてはまらない」を1点として、平均値を算出した。なお、こ

れ以下は欠損値のある対象を除いた125校の回答を対象とする。

1) 全体の傾向

「ひろば」型、「教室」型、「鑑賞・発表会」型の回答を合計し、全体の傾向として平均値を算出した結果が図1である。図を見ると、まず項目8、項目9で値が高いことが分かる。回答した養成校教員は、学生が活動に参加することで、保護者や子どもと“関係をつくる”力が養成されるよう、期待していることが伺える。

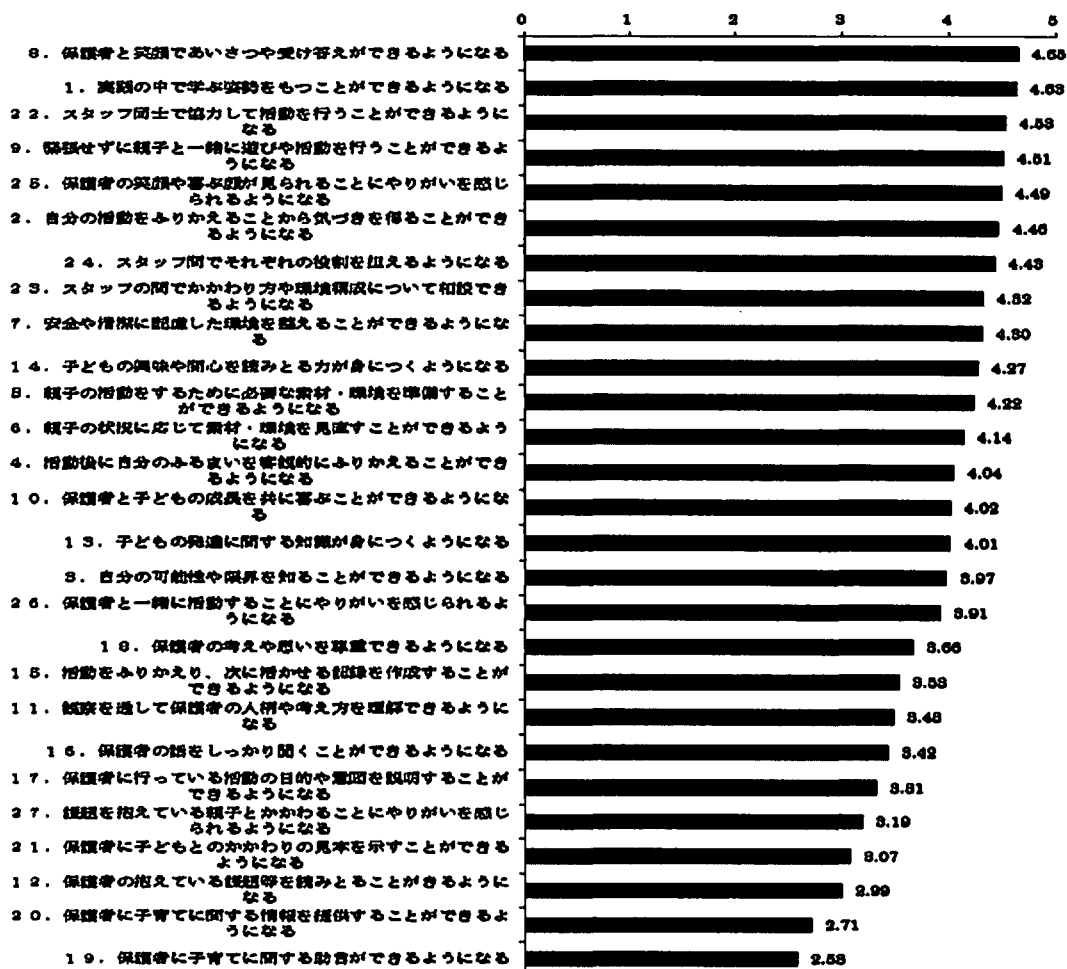


図1 学生に身につくことが期待される知識や技術についての結果 (N=125)



表9 活動形態による比較

	①「ひろば」型の活動 N=29		②「教室」型の活動 N=59		③「観賞・発表会」型の活動 N=37		F 値
	M	SD	M	SD	M	SD	
1. 実践の中で学ぶ姿勢をもつことができるようになる	4.66	.48	4.68	.60	4.54	.51	
2. 自分の活動をふりかえることから気づきを得ることができるようになる	4.66	.48	4.56	.70	4.16	.80	5.21** ①②>③
3. 自分の可能性や限界を知ることができるようになる	3.79	.86	4.05	.82	3.97	.73	
4. 活動後に自分のふるまいを客観的にふりかえることができるようになる	4.10	.86	4.12	.77	3.86	.75	
5. 親子の活動をするために必要な素材・環境を準備することができるようになる	3.93	1.03	4.36	.87	4.24	.83	
6. 親子の状況に応じて素材・環境を見直すことができるようになる	4.00	.93	4.24	.97	4.08	.83	
7. 安全や清潔に配慮した環境を整えることができるようになる	4.28	.84	4.46	.54	4.08	.64	3.88* ②>③
8. 保護者と笑顔であいさつや受け答えができるようになる	4.62	.56	4.80	.41	4.43	.69	5.24** ②>③
9. 緊張せずに親子と一緒に遊びや活動を行うことができるようになる	4.55	.63	4.58	.72	4.38	.72	
10. 保護者と子どもの成長を共に喜ぶことができるようになる	4.24	.83	4.20	1.00	3.54	1.10	6.05** ①②>③
11. 観察を通して保護者の人柄や考え方を理解できるようになる	3.82	.82	3.59	.98	3.03	.99	6.43** ①②>③
12. 保護者の抱えている課題等を読みとることができるようになる	3.28	.84	3.19	.97	2.46	.96	8.51** ①②>③
13. 子どもの発達に関する知識が身につくようになる	4.24	.74	4.25	.68	3.43	1.07	12.7** ①②>③
14. 子どもの興味や関心を読みとる力が身につくようになる	4.38	.73	4.40	.59	3.97	.83	4.60* ①②>③
15. 活動をふりかえり、次に活かせる記録を作成することができるようになる	3.83	.85	3.66	1.17	3.08	1.04	4.88** ①②>③
16. 保護者の話をしっかり聞くことができるようになる	3.86	1.13	3.64	1.03	2.73	1.04	11.75** ①②>③
17. 保護者に行っている活動の目的や意図を説明することができるようになる	3.41	1.15	3.51	.97	2.92	1.02	3.86* ②>③
18. 保護者の考えや思いを尊重できるようになる	4.10	1.01	3.83	.91	3.03	.96	12.34** ①②>③
19. 保護者に子育てに関する助言ができるようになる	2.72	1.16	2.69	1.00	2.27	.84	
20. 保護者に子育てに関する情報を提供することができるようになる	2.90	1.26	2.81	1.11	2.41	.98	
21. 保護者に子どもとのかかわりの見本を示すことができるようになる	2.97	1.18	3.34	1.04	2.73	1.19	3.53* ②>③
22. スタッフ同士で協力して活動を行うことができるようになる	4.28	.88	4.62	.64	4.59	.55	
23. スタッフの間でかかわり方や環境構成について相談できるようになる	4.07	1.07	4.41	.75	4.38	.72	
24. スタッフ間でそれぞれの役割を担えるようになる	4.21	1.01	4.47	.84	4.54	.61	
25. 保護者の笑顔や喜ぶ顔が見られることにやりがいを感じられるようになる	4.38	.73	4.62	.64	4.38	.79	
26. 保護者と一緒に活動することにやりがいを感じられるようになる	4.17	.71	4.24	.71	3.19	1.24	16.96** ①②>③
27. 課題を抱えている親子とかわることにやりがいを感じられるようになる	3.52	1.06	3.44	1.13	2.54	.99	9.63** ①②>③

\*\*p<.01 \*p<.05

また、項目 1、項目 25、項目 2 の値が高いことが分かる。教員は、学生自身が“学ぶ姿勢”や“やりがい”をもつこと、“ふりかえり”ができるようになることを期待している。さらに、項目 22、項目 24 の値が高く、スタッフ同士で協働して活動に取り組めるようになることを期待しているものと考えられる。

一方で、項目 21、項目 12、項目 20、項目 19 の値が低いことが分かる。学生が“行動見本を示す”“課題を知る”“情報提供や助言をする”という知識や技術を習得することの期待は低いといえる。

## 2) 活動形態による比較

活動形態による比較を行うため、各項目において一元配置の分散分析を行った(表 9)。その結果、多くの項目で値が低いのが「鑑賞・発表会」型であった。有意差が示された項目を詳しく見ると、親子との直接的な関わりから得られる知識や技術に関係する項目であった。また、「ひろば」型の活動では、全体的に有意に高い値を示した項目が多かった。一方で、有意差は見られなかったものの、項目 22・23・24 といったスタッフ間の協働に関する項目では値が低い傾向を示した。さらに「教室」型の活動の結果を見ると、有意差が見られた項目すべてで値が高かった。

このような結果になった理由として、教員や学生の参加形態(活動への関わり方)が大きく関連すると考えられる。「鑑賞・発表会」型では、学生の参加形態として「子どもと自由にかかわる」「親と自由にかかわる」が、他の活動に比べて割合が低かった。この活動形態では学生の自由な関わりが少ないことが伺える。「ひろば」型では、学部生が「企画や運営などに関わっている」割合が低く、「主として見学・観察」という参加形態の割合が高かった。この活動形態は学生主体の実践活動までには至りにくい実態が伺える。一方で、「教室」型の活動は、教員、学部生とも「直接親や子どもと関わっている」

割合が高く、「子どもと自由にかかわる」「役割をあらかじめ決めてかかわる」といった学生の参加形態が有意に高くなっており、学生の能動的な活動が展開されている実態が伺える。以上のことから、教員は、学生と協働し親子と直接的な関わりを行うことで、学生の子育て支援に関する知識や技術の高まりを期待していることが伺える。これらの結果は、今後の保育者養成校において子育て支援の活動形態、教員や学生の参加形態(活動への関わり方)を検討する上で示唆を与えるものになっていると考えられる。

## 4. まとめ

本研究では、全国指定保育士養成施設 565 校(課程)を対象に、キャンパス内で行っている子育て支援活動の実施形態や内容、学生の参加形態や活動の内容等の実態調査を実施した。まず明らかになったことは、回答した 189 校(課程)のうち、約 7 割の保育者養成校が何らかの子育て支援活動を行っている実態が示されたことである。調査結果からは、比較的高い割合で養成校が子育て支援活動を行っている実態が明らかになった。

次に、活動形態別の分析から特徴的な結果をまとめると、「ひろば」型の活動では、学生の参加形態として、「主として見学・観察」と答えた教員の割合が他の活動に比べて高かった。また、「教室」型の活動では、学生の単位取得について「取得ができる」と回答した割合が高く、参加形態でも「子どもと自由にかかわる」「役割をあらかじめ決めて関わる」が有意に高い値を示した。「教室」型の活動は、学生が主体的・能動的に活動できる形態となっていることが示唆された。また、「ひろば」型、「教室」型の活動は、活動の開設期間が 10 年未満の養成校が 8 割を超えており、近年になってこれらの活動を始める養成校が多いことが伺えた。

養成校の教員が活動を通して学生に身につく

と期待する子育て支援力に関しては、親との関係を形成する力や学生学ぶ姿勢や振り返りといった保育基礎力、スタッフ間の協働や連携する力に関する項目の値が高かった。一方で、「行動見本を示す」「課題を知る」「情報提供や助言を行う」といった保育指導に関連する項目の値は低いことが明らかになった。

今後の課題としては、今回の調査で取り上げた常設で専属スタッフを有する「ひろば」型、「教室」型、「鑑賞・発表会型」以外の活動についても検討し、多角的な分析を行いたい。また、今後、子育て支援活動に参加した学生への調査を実施し、本調査の養成校の教員の結果をあわせて検討することで、養成校における子育て支援力養成のためのカリキュラムを提示する方向で研究を進めていきたい。

#### 注

- \*1 本研究の「学部生」とは、養成校（課程）の学部・学科等に所属する学生を意味しており、質問紙において大学院生と区別するために使用したものである。文中の「学生」と同義に用いている。

#### 引用文献

- 1) 厚生労働省, 「保育所保育指針」, フレーベル館, 2008.
- 2) 文部科学省, 「幼稚園教育要領」, 教育出版, 2008.
- 3) 土居隆子, 子育て支援力を育む授業内容の検討～学生の意識変容から～, 活水論文集, 2011, 54, 63-80.
- 4) 秋山真奈美, 現場で求められる幼児教育職務実践力とは—幼児教育職務実践力の作成を通して—, 佐野短期大学研究紀要, 2011, 22, 129-141.
- 5) 福井逸子・小栗正裕・瀧川光治, 「子育て支援力」育成のための保育士養成教育に関する研究(1)—短期大学へのアンケート調査の分析を通して—, 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, 2008, 1, 135-150.
- 6) 汐見和恵, 保育者の役割と保育者に求められる専門性・今求められている子育て・子育て支援のコンピテンシー—, 東京文化短期大学こども教育研究所紀要, 2007, 2, 31-42.
- 7) 橘知里・小原敏郎, 保育者の子育て支援力の養成に関する研究—養成段階からの学びの連続性に着目して—, 日本家政学会誌, 2014, 65 (8), 415-422.
- 8) 福井逸子・小栗正裕・柴田智世・瀧川光治, 「子育て支援力」育成のための保育士養成教育に関する研究(3)—3年間の継続研究を通してモデルシラバスの提示を行う—, 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, 2010, 3, 79-90.

#### 謝辞

この度の研究にご賛同いただき、ご多忙の中ご協力いただきました養成校の先生方に心よりお礼申し上げます。なお、この研究は、共立女子大学総合文化研究所の研究助成を受けて行いました。